



最優秀賞
(経済産業大臣賞)



(右) 青木さんは「肌ざわりが良く、触れたいなる材料」を目指していると話。

“強度という弱点を、技術力で克服する”

「Gywood®」とは、どのような特長がある素材なのでしょうか。

青木 スギなどの木材を、ギョツと圧縮することで、強度を高める「表層圧縮技術」です。そこから「Gywood® (ギョツド)」という名前を付けています。

「スギを木材として、広く利用しようと考えたのはなぜでしょうか。」

青木 スギは人工林の中でも、蓄積量が多く、北海道から九州の屋久島まで、広く分布している日本特有の針葉樹です。資源としてはとても豊富なのですが、柔らかく傷つきやすいという物理的な弱点がありました。

「スギの弱点である「柔らかさ」を克服するため開発したのが、「Gywood®」だったのですね。」

青木 圧縮した後の木材は、圧縮率にもよりますが、約半分以下の厚みになります。表層部は特に高密度化しますが、内部の密度はそこまで高くなりません。そのため、スギの軽さや温かみを残したまま、従来の無垢材の常識を超えた形状の安定性を保つことができます。

「まさに進化した木材である「Gywood®」ですが、開発の経緯を教えてください。」

青木 圧縮技術は元々、プラスチック成型のプラスチック成型の技術を応用したものでした。この技術に改良を加えて様々な形状の美木材で試験を繰り返して、開発を進めていきました。念頭に置いていたのは、スギを中心とした国産針葉樹の需要を、付加価値の高い分野で拡大していくことでした。

「開発を行う中で、最も苦労されたことは。」

青木 木材にとって重要なのは、実は乾燥技術なんです。最適な含水量を見つけ出すまで、何度も試行錯誤を繰り返しました。決して圧縮技術だけで成り立っているわけではありません。伐採から始まり、製材、乾燥、圧縮した後には木材として仕上げていく。最初から最後まで多彩な技術が詰まっています。日本の木材加工技術の粋が集まり、複合化して作られているのが「Gywood®」です。



(左) 「Gywood® テーブル用天板」は軽く、持ち運びしやすのが特長。

(右) 素材の産地から加工、流通、販売・施工まで、全ての工程を手がけている。



特別インタビュー

木が創り出す“未来”のカタチ

木材をギョツと圧縮し、強度や加工性を向上させた素材「Gywood®」。ウッドデザイン賞2023では、「Gywood® テーブル用天板」として最優秀賞(経済産業大臣賞)を受賞し、その活用の幅はさらに広がっています。開発に携わったナイス株式会社・青木良篤氏が見据える未来とは。

■ ナイス株式会社

神奈川県横浜市鶴見区鶴見中央
4-33-1 ナイスビル
HP : <https://www.nice.co.jp/>



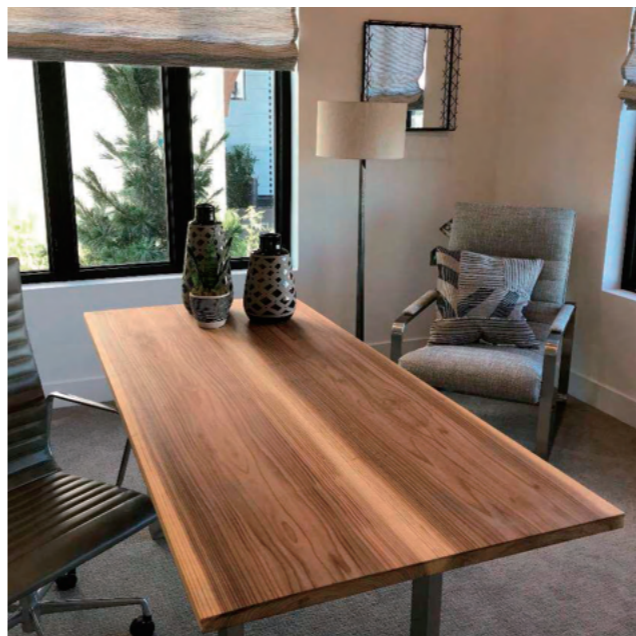
Yoshinori Aoki
青木良篤 氏

ナイス株式会社 脱プラ・木質化R&Dセンター センター長

1997年、ナイス株式会社に入社。主に木材営業を担当し、西日本木材統括部長、国産材利用開発部長、資材事業本部 首都圏木材ブロック長などを経て、2023年より現職。インフラ再生、環境再生、資源再生の3つのビジョンを掲げながら、国産材の需要創造に力を注いでいる。自他共に認める「木材マニア」として、Instagram（アカウント：bemuku8）ではGywood®製のお盆と共に生活する「旅するお盆」企画も展開中。

(上) 表層圧密技術の活用より、今まで不可能だった規格化・標準化をすることができたと語る青木さん。ナイス株式会社では古くなった会議用テーブルを再利用し、「Gywood® テーブル用天板」を使った木質化を実現した。

認知を広げる中で見えた一筋の光明



(左) 2018年の優秀賞（林野庁長官賞）を受賞した時は素材として応募した。

「2018年に「表層圧密 Gywood® シリーズ」がウッドデザイン賞 優秀賞「林野庁長官賞」を受賞されています。どんな思いで応募されたのでしょうか。」

青木 「Gywood®」の基礎的な開発が2017年に終わり、新素材として展開をしていきたいという強い思いがありました。そこで、世の中に認知されるようウッドデザイン賞に応募したんです。

「今までの5年間に「Gywood®」は、どのように進化していったのですか。」

青木 この数年で、木材を取り巻く環境は大きく変化してきました。カーボンニュートラルなど、持続可能な社会に

向けた動きが加速し、「木質化」にも注目が集まっています。「Gywood®」についても、内装や外装、家具などの生活用品のジャンルに貢献できるようなステージが増えていきました。

「環境の変化と共に、新素材として順調に浸透していったのでしょうか。」

青木 一つの転機になったのが、優秀賞受賞から4年後の2022年です。老舗の家具メーカーに「Gywood®」が採用され、テーブルなどへの商品化につながりました。この成功体験が大きな自信になり、2023年の再応募へと結びついていったんです。

グローバルを見据えて 次の木材製品を

「Gywood®」の技術は、これからどのように発展していくのでしょうか。」

青木 「Gywood®」は、世界的に希少な広葉樹の代替技術として歩んできました。これももう1歩、次のステージに進めるために、「密度のコントロール」にチャレンジしていくことが大切だと考えています。圧密率を調整し、メーカーが求める物性を担保する木材を作りだしていきたいです。

「これから先どのような製品が作られるのか、教えてください。」

青木 例えば、お盆（トレイ）は圧密と切削で形を作ります。こうした技術は、全体圧密と呼ばれます。同じことを表層圧密だけでやると木の中の柔らかい部分まで外に出してしまうのですが、今後は全体圧密も用いて多様な製品を作っていきたい。そのためには、メーカーと共に開発していくこともこれから必要になりますね。

「技術の発展によって、世界はどう変わっていくと考えていますか。」

青木 木材は、再生可能な資源です。中でもスギの利用は日本の環境を守るために、これからますます大切になっていくと考えています。日本だけではなく、世界を視野に入れて、スギを活用した製品を展開していきます。

20年先にある 「木を大切に使う将来」

「今後のウッドデザイン賞に、どのようなことを期待されていますか。」

大きな反響を得た 「大臣賞」の受賞

「大きな転機を経て、「Gywood®」の認知が広がっていく中で、2023年に「Gywood® テーブル用天板」として、ウッドデザイン賞へ再応募されています。その狙いはどこにあったのでしょうか。」

青木 2023年は木質化の需要が高まり、社内でも経営陣が「Gywood®」を対外的にアピールする場も増えるタイミングでした。ウッドデザイン賞の受賞は、客観的な評価として、さらに知ってもらうための大きな助けになり、弾みになると考えました。

「最優秀賞「経済産業大臣賞」を受賞され、反響はいかがでしたか。」



(上) 2022年林野庁長官賞を受賞した「禅坊 靖寧」にもGywood®が採用されている

青木 やはり最優秀賞、特に「大臣賞」の重みは感じますね。最優秀賞の受賞は注目度が高く、説明に耳を傾けてもらえるきっかけになっています。しかし、経営陣からは「とりあえず、1つの節目だね」と声をかけられ、「まだ、これからです」と気を引き締め直しました。

「受賞前後での、顧客の変化を感じている部分はあるのでしょうか。」

青木 面白い動きとしては、トラックの荷台に国産スギの「Gywood®」を使用する取り組みがあります。南洋材を代替することで、従来よりも重量が大幅に軽減され、燃費の向上に加えて、積載効率を高めることもできるなど、活用の幅が広がっています。



(右) ナイス本社ビルの1階フロアには「Gywood®」を体感できる空間が広がっている。



(右) 「Gywood® テーブル用天板」は軽く、持ち運びしやすのが特長。

青木 私たちが受賞企業とコラボレーションをして新しいものを作っていたら面白いですが、それができる方法を考えたいです。また私個人の思いとしては、これから大量消費という時代が変わり、木を大切に使う時代になっていくと思っています。日本の森林資源は充実して、成熟していますが、このまま持続していくことは難しくなっています。ウッドデザイン賞も10年後、20年後を評価するような、ロングライフデザインという視点も必要になっていくのではないのでしょうか。」

「最後に、これからウッドデザイン賞を目指す方たちに、メッセージをお願いします。」

青木 私はこれまで、木材を切り出す現場に何度も立ち会うことができました。全国各地や海外へ足を運び、木材の価値そのものを見極めることができたと感じています。生産者のこだわりを間近に見て、気づかされることも多いはず。ウッドデザイン賞の受賞を目指す方も、ぜひ木材の産地に足を運んでみてください。



2023年受賞 最優秀賞(農林水産大臣賞)

林業×福祉プロジェクトから生まれた「森tebaco」シリーズ。

社会福祉法人 幸仁会 川本園、NPO法人木育・木づかいネット、パワープレイス株式会社が中核となり、森のめぐみを活かし、しごとをつくる 魅力ある地域材製品のデザインをテーマに、プロジェクトを推進。障がい者が生き生きと働けるウッドデザインとは何か？

(2023年12月6日受賞記念セミナーにおける受賞者プレゼンテーション内容より)

林業×福祉連携プロジェクト「森tebaco」

パワープレイス株式会社(東京都)/社会福祉法人 幸仁会 川本園(埼玉県)/ NPO法人木育・木づかいネット(東京都)

■評価のポイント

地域の林業、木材産業にも消費者の関心を向けるきっかけとなる作品を消費者の購買意欲をそそるクオリティ、優れたデザイン性で作り出した点を評価した。今後、同様の取り組みを進める他の授産施設に与るべきモデルとなりえるものとして本賞に選出した。

■審査員のコメント

審査委員 益田文和氏
プロダクトデザイナー：ウッドデザイン賞
審査委員(プロダクト分野長)

今年には本当に驚きました。これこそが一等賞に値するんです。プロダクトデザインとは、縁をどうたり薄く軽く見せようと考えてしまうものですが、これは「木」がそこにどんとある、しかも直角ではなく全部が丸くてほっとする。作り手がみんな違う形をつくったり、今三種の用途を何種類も増やしたらもっと面白いし、さらに日本全国、場合によっては世界中の木を使うことで、ほとんど可能性がひろがるユニバーサルデザインだと思います。今後取材などで取り上げられると思いますが、それを見て、こういう取り組みもウッドデザイン賞なんだと認知され応募も増えると思います。日本の色々なところにこの取り組みが届けられるようますます勢いをつけていってほしいと期待しています。

凸凹な技術力に 応じた展開で、 地域産材を活かしたい

本事業の取り組みによって、埼玉県で産出される優れた木材の有効活用を進めることで、地域の林業、木材産業にも少なからず良い影響を与えることができました。これらの成果の展開において課題となるのは、川本園が優れた技術力を既に持っていたことが成功の要因であり、このモデルを他の施設にそのまま適用することが難しいことです。最終的な仕上げ加工を川本園で行うなどの工夫や、今回の取り組みをより深く分析し、他の施設にも適用できるノウハウを抽出していきたいです。

■福祉法人 幸仁会 川本園(埼玉県)
埼玉県深谷市本町7080-8
<https://kikitomori100.net/reportages/001204.html>



(上)繰り返し繰り返し試作をつくりミーティングを重ねる関係者たち

森のめぐみで 働く人の個性を表現する

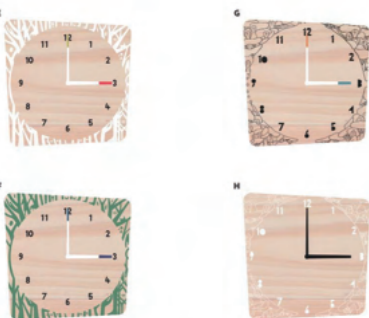
プロジェクト推進の過程で特に重要となったのは取り組む事業所で働く人たちが下請けでなく働きがいのある製品づくりとは?その問いと関係者全員で真摯に向き合いました。その結果として、パーツが少なく、シンプルながらも、地域の木材そのものの良さを引き出したデザインが完成しました。

出来ぬ理由より「どうやってできるか」を考える
林×福祉連携の取り組みを全国の作業所で展開し地位向上を目指すことが次の目標になりました。川本園の田中理事長はこの1年の成果についてこう語ります。「この事業で得た一番の成果は、関わってくれた職員たちの変化です。試作を始める段階では、「できない理由を訴えていたのが、1年間やっけていく中で、「どうやったらできるか」を一生懸命考えるようになった。「できない苦勞も一生懸命やって、いろいろな人に助けてもらえば乗り越えられる、そう考えるようになったんです」成果として、障がい者が継続的に働く場、仕事をつくり、その自立を支援するという目的の一部については達成できました。また、試作品の生産にあたって、「新しい仕事づくり、事業所のスキルアップにつながりました。」

いきいきと参加できる 製品を地域産材で

川本園の下記の3つの課題にフォーカスして、製品開発を行いました。①企業の下請けではなく、働き甲斐のある職場をつくる ②付加価値をつけた独自の製品開発 ③官公庁、企業などこれまでの顧客だけでなく、一般消費者にも訴求できる魅力的な製品の開発 試作段階では、パーツが障がい者の方にとっては多すぎたなどの課題が浮き彫りになりましたが、障がい者が生き生きと働くとは何か?という共通の問いを関係者で深掘りする中で、川本園の技術力を最大限に活かした魅力あるデザインに辿り着きました。イラストは木材のデザインを引き立てるため、優しく目立ちすぎないように意識して作成しました。

林業連携製品開発
時計_文字盤
2022/02/14



(上)地域の木材そのものの良さを引き出したデザイン。
(中)第一試作品。(下)障がい者が継続的に働く場の創出とその自立を支援している。





2023年受賞 最優秀賞(経済産業大臣賞)



(上) 銘木に負けない高級感と重厚感を醸し出しているが軽量で女性も簡単に持ち運べる

自社「脱プラ・木質化」で生まれた テーブル用天板

自社創立70周年記念 本社リノベーションのテーマ「脱プラ・木質化」に合わせ、古くなった会議用テーブルを廃棄せずに再利用、「Gywood®」で天板を作成し、木質化を実施したのが製作のきっかけでした。テーブルリノベーションの利点として、①工事不要で手軽に木質化②木質家具の効果で集中力・発想力アップ③軽い天板で持ち運びしやすい、華奢な脚デザインも採用可能、が挙げられます。熱伝導率が低いため温もりが感じられ、無垢材の香りと一つ一つ違う木目の面白さに、スギそのものの魅力を存分に楽しめる製品となっています。

林野庁長官賞受賞から5年。 国産針葉樹のさらなる木質化需要創造へのチャレンジ

針葉樹の板の表面を、ギュッと表層圧密をして無垢材を進化させた『Gywood®』。反りや割れが気になる従来の針葉樹無垢材に比べ「表面硬度」や「形状安定性」が高まり各段に利用価値を広げる素材とした新技術が評価され、2018年に林野庁長官賞を受賞しています。あれから5年。再度応募した『Gywood®』の進化とは…

(2023年12月6日受賞記念セミナーにおける受賞者プレゼンテーション内容より)

Gywood® テーブル用天板

ナイス株式会社

■ 評価のポイント

針葉樹の無垢材の表層部のみを圧縮、高密度化する技術で硬度や強度を向上させる技術により、天板を取り換えるだけの簡易さで、オフィス、各種施設等でのデスク及び会議用テーブルの木質化を促進できる。木質化による炭素固定、杉の大径材の利用など社会課題の解決に資する複数の効果をもたらす。花粉症対策としての杉の需要拡大にも寄与するものとして本賞に選出した。

■ 審査員のコメント

益田文和氏
プロダクトデザイナー・ウッドデザイン賞審査委員(プロダクト分野長)

「Gywood®」の良さは前回受賞の実績で示されているので、今後どういう進化があるか知りたくなります。モジュールのサイズ、集成材を加工できるのか、スギ以外の木材は加工できるのか、立体対応はできるのか、など。例えば机の対にイスがありますが、緩やかなカーブを人為的に作り出すことはできるのか、塗装はどうか、外装材として使用できるのかなど、5年間の実績という成果だと思っんですよね。技術的に様々なトライされているのが分かりました。4、5年前は価格が高いと言われましたが、最近は当然高いけど長く使えるよねという感想もいただくので、長く使っていただく用途の製品ということがよく分かりました。ますますたくさん使われる様になるといいなと思います。

「ありあまる国産材を「名木」に！」

かつては海外から取り寄せていた希少性の高い「銘木」も世界的に伐採が進み、入手が困難になってきたこと、そして環境負荷の観点から、熱帯木材の輸入が困難になってくると想定されます。安価な外国産木材も輸入価格が高騰しています。有り余る国産針葉樹を銘木にかわる「名木」として、幅広い板材を規格化・標準化し、高い形状安定性を誇る「Gywood®」は様々な用途で活用できます。大径化したスギは付加価値の低い使い方になってしまっています。「Gywood®」は含水率10%以下まで落とすため、時間とコストがかかっていますが、圧縮しているため立米単価が上がってしまいが、湿度の影響を得にくく、幅広薄型の無垢の一枚板として製品化することによって、様々な用途に長期使用できるメリットがあります。

日本の地域林産業を元気にしたい！」

スギを中心とした日本の森林は戦後植林され、「少子高齢化」状態が進行しています。高齢化した木はCO2固定力が減退するため、適切に伐って植林・保育することで、持続可能な森林資源を維持出来ます。また、近年健康被害として問題になっている花粉症についても、スギ花粉の発生を抑える木に植え替えることで健全な森林環境へ転換することができます。これからも「Gywood®」の技術を用い、各種メーカーとコラボした規格製品の開発により、建築材のみならず他分野での需要喚起を促進し、持続可能な森林木材産業の活性化・価値向上を目指します。

■ ナイス株式会社
神奈川県横浜市鶴見区鶴見中央4-33-1 ナイスビル
https://www.nice.co.jp/

学名クリプトメリア・ジャポニカ。
**日本の隠された宝、
杉の価値向上を再び**
表層圧密Gywood®シリーズは杉の軽さやぬくもり、衝撃吸収性をそのままに表面のみを固く加工することによって、針葉樹の利用価値を広げたとし、2018年のウッドデザイン賞優秀賞・林野庁長官賞を受賞しました。その後もラインナップ・バリエーションを広げ①スギ等、国産針葉樹の固定概念を変える素材②日本の自然を「きゅっと」と詰め込んだ無垢材③強さと優しさを併せ持つ新しい無垢材④硬さと強さ⑤硬いけど軽い⑥無垢材なのに高い形状安定性という価値創出を実現しました。

2度目のウッドデザイン賞 上位賞受賞

優秀賞「林野庁長官賞」ライフスタイルデザイン部門 技術・建材分野
表層圧密Gywood®シリーズ

表層圧密テクノロジーとは
微細な針葉樹の表層を
ギュッと圧縮すること
Gywood®

評価のポイント

- スギのメリット(温もり、衝撃吸収性など)はそのままに、表面のみを固くして用途を多岐に広げた
- 針葉樹の利用価値を広げる
- 内外装や家具での活用が期待される

2018年以降、ラインナップ・バリエーションを広げ、スギ等国産針葉樹の木質化需要創造と国産針葉樹の固定概念を変えるべく進化を続けてまいりました。



(上) Gywood®を使用して制作されたオフィス家具。(中)私立小学校に納入、自分の天板を6年間使用し、卒業の際持ち帰れる。(下) Gywood®に使用した地域杉。



2023年受賞 最優秀賞(国土交通大臣賞)

竹中工務店北海道支店の中核拠点を担うオフィス

北海道の森林とまちをつなぐ循環の促進を狙い、一般流通材を用いた「ダブルティンバー®」工法を新たに開発し、亜寒帯気候における非住宅木造のプロトタイプを目指したオフィスである。微気候空間を作り出す温熱入れ子構成を半透明の外皮で包み込むことで、四季の変化を享受する亜寒帯の縁側と呼べる木質空間を創出している。

(2023年12月6日受賞記念セミナーにおける受賞者プレゼンテーション内容より)

北海道地区FMセンター

株式会社 竹中工務店(北海道) / 西條産業株式会社(北海道) / ようてい森林組合(北海道) / 株式会社ハルキ(北海道) / 協同組合オホーツクウッドピア(北海道)

■評価のポイント

郊外に新築される中低層オフィス・店舗等を主なターゲットとした、非住宅木造のプロトタイプを目指した各種の工法、技術開発に取り組んでいるとともに、亜寒帯気候地域における脱炭素化促進とワーカークラスのウェルビーイングの向上の両立を企図している。道内の森林資源の活用促進を後押しし、非住宅分野の木造化、森林と都市のつながりが期待できるものとして、本賞に選出した。

■審査員のコメント

審査委員 鈴木恵千代氏

空間デザイナー・ウッドデザイン審査委員 (建築空間分野長)

第一印象は近年の建築空間として評価すべきなんとも美しいデザインだと思えます。ダブルティンバーという技術の採用と北海道の森全体を考えるというコンセプトがとても優等生。すっきり簡単に見えて、そう簡単にできないと思います。デザイン・設計・施工で苦労した点、実際使用している方の感想、失敗したところはあるのか他、多くの事を聞いてみたいという大変興味のもてる作品の一つです。モダンで新しい技術を使った建築物に鉄骨ではなく、木材が使われたことが、森と人との距離がものすごく近いものになるという効果があると思えます。「森林ランドサイクル」で北海道中の建築物がこのような建築物になったらと考えたと素晴らしいコンセプトだと思います。

デジタルファブリケーションと職人技の集大成

苦労した点は、木加工をまとめていくという点でした。今までにない取り合いが頭の中ではうまくいく、と感じていても、実際は3次元モデルの作成などをしたうえで、デジタルファブリケーションとリアルな検証を西條産業さんと、ハルキさんと協議しました。設計段階では、地域の特性もあり暑さや寒さなど気温の心地よさが懸念されていました。どの程度もデジタル技術によるシミュレーションを積み重ねた結果として、とても居心地が良い空間となつて、実際に使用している方たちのほとんどの方から木の空間は前より心地よいという意見をいただいています。鉄骨造とは異なる暖かな木の印象もあり、良い影響を働き手に与えています。

チャレンジングが気づきを生んだ

今回は自社のオフィスという事で果敢なチャレンジをしやすいプロジェクトではありましたが、例えば、外壁のポリカーボネートの伸縮による音鳴りなど、これから他の事業者が使用する建造物に活用する場合は、注意が必要なものもあります。また、下階を倉庫として利用しているため、床の遮音性能は問題とはなっていないが、一般のユーザーに使用してもらう建築物の場合、改めて注意点を整理して、今後の展開を考えていかなければならないと考えています。

■株式会社竹中工務店 北海道支店
住所 北海道札幌市中央区南一条西十二丁目32番地2 CRES CUBE
<https://www.takenaka.co.jp/>

道産木のある未来をみたいから。

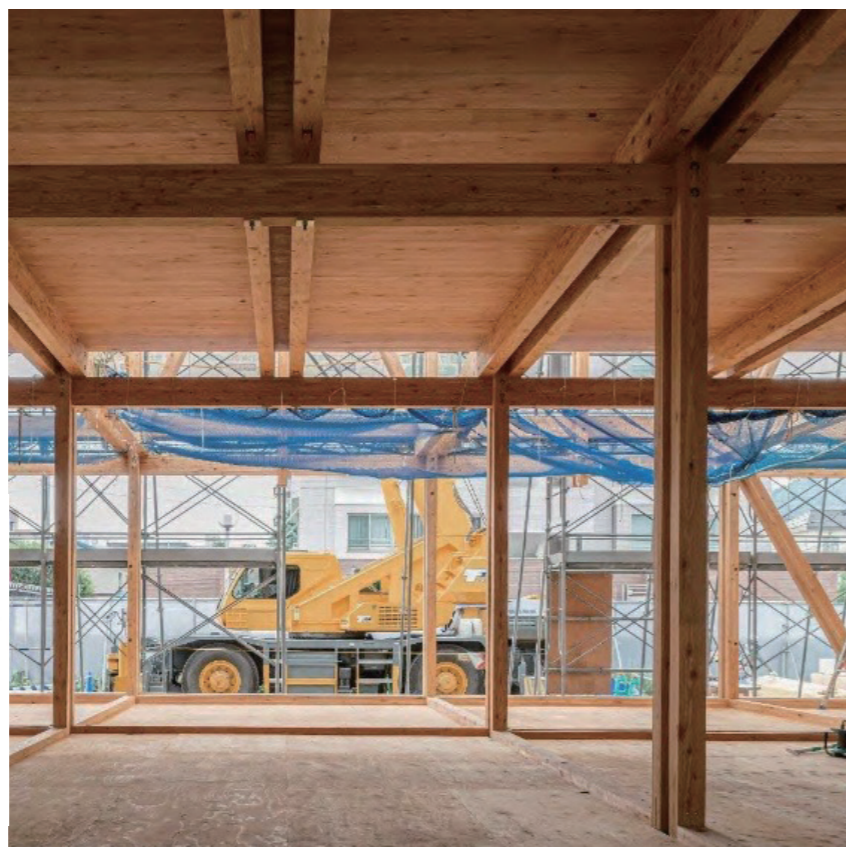
竹中工務店は従来の森林サイクルを含んだ、森林資源と地域経済の接続可能な好循環を「森林ランドサイクル」と名付け、活動しています。今回の木造建築物は、ダブルティンバーという新しい木架構システムを利用して、建造されています。特徴として①汎用性が高い②耐震性と執務空間の確保の両立③豊富な道産地域材採用率100%④躯体工事のCO2排出量を70%程度削減(対同規模鉄骨造)があり、その結果として、特殊な技術、木材利用しない方法で、北海道産の木材100%で建造された心地良い木造空間が作られました。

「ランドサイクル」について



森林サイクルから「森林ランドサイクル」へ

従来の森林サイクルを含んだ、森林資源と地域経済の持続可能な好循環を「森林ランドサイクル」と名付け、活動しています。



(上)新しい木架構システム「ダブルティンバー」の開発

道産材を使った非住宅木造建築化への挑戦。

一般流通材を用いた「ダブルティンバー®」工法を新たに開発し、北海道の森林とまちをつなぐ亜寒帯のオフィスを木質化した、株式会社竹中工務店(北海道)の北海道地域FMセンター。通常非住宅分野に使用しない木材を利用することによって、脱炭素化推進と植えるビーイングのの向上を両立したサステイナブルな取り組みを目指す未来とは…



JAPAN WOOD DESIGN AWARD 2023



(上) 共創スペース。ポリカーボネートを通して屋内にやわらかい光が広がる。
(中) 風倒木を利用したゲンボクベンチ。
(下) 朽ちた木材を金属左官補強でアップサイクルした机。





2023年受賞 最優秀賞（環境大臣賞）

森づくりから建てた「さとのえ」でパーマカルチャー体験を

創立115年の株式会社サカモト。林業を生業に設立され、製材、施工と一貫した事業を活かし、地域との関りまで視野に入れ、接続可能な持続的な自然とこれからの暮らしを発信する拠点として「さとのえ」を建築。株式会社サカモトの考える、ランドスケープデザインに基づく自然との共生と暮らしづくりを考えたいウッドデザインとは…

（2023年12月6日受賞記念セミナーにおける受賞者プレゼンテーション内容より）

森の麓の拠点「さとのえ」の取り組み

株式会社サカモト

■評価のポイント

都市生活を営みながら持続可能な暮らしを志向する、主に子育て世代をターゲットにして、モデルハウスを拠点として森林散策ツアーや森に親しむワークショップ等を地域の団体と連携しながら開催して、木と森への理解醸成に寄与している。建築においてもフィールドワークや調査結果を反映した設計を行い、地域産材にこだわり地域の職人が施工、環境負荷低減、地域の産業活性化を満たす内容として本賞に選出した。

■審査員のコメント

審査委員 鈴木恵千代氏

空間デザイナー・ウッドデザイン審査委員（建築・空間分野長）

この作品は見るからに住みたくなる気持ちのいい印象があります。日本の伝統的なスタイルと民族史に基づいて住まいと自然環境との関係性を検証していると感じました。昔の日本人の暮らしはなんて贅沢だったんだろうと感じました。何百年も地元で培われた住まいや空間づくりを得て、現代において最新の住まいづくりのあり方を感じました。今後地域との繋がりを持ちながら未来の住まいはどうあるべきか考え、ウッドデザインに役に立てられれば日本中の家づくりの目標になりうる作品だと思います。素晴らしいコンセプトだと思います。

現代の住まいから なくなった「働く」を 取り戻すために

人間は自然に生かされており、自然に対して尊敬の念を持ち感謝をし、自然の摂理に沿って森林の恵みを受け共生しています。それによって豊かな食や住まい、そして働く場所や守るべき伝統や文化が地域に生まれ、コミュニティが生まれます。現代人は消費が主になってしまいました。生活で失われたのは「働く」こと。土間を作り、畑もつくり、家づくりだけでなく、働く場も必要です。自然の素材に囲まれた空間は、人間生命と親和性があると思います。虫や微生物が多様に存在し、環境が整い体調が良くなる。また、木を使うことによつて、熱伝導率が低いから体温が奪われにくく体の負担が少な



（上）木質燃料をつかい土間の暖気を保つためのペチカ

100年以上植林を 続ける森から暮らしへ、 めぐるめぐみ

株式会社サカモトは2018年、森の麓に自然と共生する暮らしのモデルハウスを建築するため、「成田プロジェクト」を開始。設計をピオフォルム環境デザイン室、及び風土形成事務所が担い、ランドスケープ・建築パーマカルチャーにおける多大な知見から提案を受け、持続的な自然環境の中での暮らしのデザインの基となる風土調査を行い「さとのえ」の基礎をまとめました。また、伝統的な暮らしや知恵と現代的な技術や科学を融合させたパーマカルチャーを実現させる、地域の資源を取り込みながら、環境性もあり、なおかつ地域経済にも寄与するモデルとなる住まいづくりを目指しました。

4 地域・自然との共生のデザイン「森から暮らしへ、めぐるめぐみ」建物のダイアグラム



10数代林業を営んできた場所で、 さらに100年続く家づくりを。

コンセプトは、地域の材料や自然素材を使うことで、地球の環境に寄与していくこと。日本の家の寿命は30年くらいといわれる中、100年後にも価値を持ち、循環に乗るような家づくりを目指しています。残念ながら家づくりも国産材が使われているのはほんの数割ですが、「さとのえ」は地元産材をつかい、災害にも強い自立型の住まいの場所になっています。自然とハイコンタクトができるのが日本の建築の良さだと考えます。



（上）母屋とエネルギー棟に分け、伝統技術と現代的な技術を組み込むよう試みた。
（中）自然の風を感じ利用する窓の設計。
（下）災害時に食生活を営めるようかまどが設置されている。

